甚だしく不満である。

余は從來の忠君愛石論に

どする、

判にならないであらうか。

常に天星及皇室に對し奉る

居るからだ。而し

忠君愛國論の 嚴正批

廣告料五 發行所 **崎四四番地** 緑石城郡湯本町

兼編 發 行 人 刷 箱 崎 義

日十五日(毎月二回)

の忠愛心、

明治時代を創造すべ

れた國民的目標は勤王

幕の大旗であつた。 明治の大維新を完成したの

の力を以てゐない何故に るか、これは聊か説明を要 U 錦旗の下に神武創業の昔 保持して居た。

何故に今の忠君愛國 明治の時代と大正の時代 の論 の運動であつたさうして此 に歸そうとする國民先黨者 置いた尊皇主義であつた。

又弦に一人の書家があつた に皇室に對する忠を言はぬ に對する愛を言はね、又別 併し彼は名利聞達を余所|の氣風を憂慮し彼等が要す|明治の時代人は其維新によ 役は特に口に國家 古むる諸先輩は今日の青年れ から てゐないのか。 今社會の顯著なる地位を置によつて遠算なく成就さ 時代の青年の心琴に觸れ 回天の事業は上 御聰明且つ御果斷な御處 明治天皇 經濟も、

に自己の畵道の研精に日も|る國家心の薄弱を概嘆する|つて始めて如實に歐米文明 さうして焦慮燥心の結果種に直面し其驚くべき精巧に 々の對策を講ずるも多くは 眩惑された。

まる。

け九年になる。

の大動亂を起さない爲に台

たと云ふ事は、

實に恐るべきた財界を導く方法だとは

さ事であると謂ばなければ一考へられぬ。

いらなっ

**(** 

景氣不景氣は吾々の生活

足らず。

として活動する真摯無私なで孤々として努めてゐると を對象として居なければ「代人の反威を買ふが如きはるといふ國民的生活信條はする、この樣な行為は國家肯繁に當るなく徒らに新時明治維新の大業を恢廣にす 皇室を對象とした行為でも 何故であるか。 時代の各人の頭腦に頗る

己自身の天職を観じ、真面 ない然し彼自身はこれを自 余は今最も率直な明治時代 色彩鮮明に 印せられた明治

政 界 横 談

忠君愛國の行為とは稱せら

ないのが昨今の忠君論で

時余は明かに

彼が全生命を

目なる自己發現に努力する

**豕を對象さしない行為は如** 

に真摯純なりと雖其れは

の私生活即ち皇室又は國

景 氣 策

北 佐 昌

る彼の豆腐は村民の最も安<br />
ふるも彼の一舉一動多く 豆腐を之に反して自から忠君の上 たるを自負し口に愛國を唱日本帝國には問題が多い殊してゐるし、赤露は精神的 隣を以て滿され目前の私利的にも對内的にも重大なる<br />
ゐる。 なき政黨るまい。我々國民も惰性的 || い現時の日本國ほど、對外にわが國體を浸さんとして 時局に際會してゐる國はあ 實にむづかしい、 して物質的の勢力擴張を策 日本の現在の立場は 輕卒な武 治にありこ斷せざるを得な一來るのである、更に言葉を ٤, 刻になった原因を觀察する よく解るが其真因は政混亂せしめたと言ふ事が出

生活を營んでゐる秋ではな業のやうなもので、全く危が勃發し、これが不景氣の 力外交などでは、下手な輕 くツて見てゐられない。

も忠實なるものと云はなけ

いえつ

支那問題を渦巻の中心と

力

は虎視耽々と

國難、

思想國難を叫

ばれる回

ある種の

ある。

國内の問題でもだ、

對する忠。

對する愛代青年の心琴に

したならばこれは只に彼が 心して買ひるものであると 作つて戸毎にひさいだとす

軒の

ģ

愛國論である。

例を以てせば一村に一 豆腐屋があつたとする

つうあることを知

つて彼を

日に日本の禁光の為に捧げ

忠愛の國七なりと呼ぶのに

上にしをかけた。この財界

昨春財界の動亂なるもの

から生じた。 動亂なるものは銀行の恐荒 界の血行である、 まり其心臓のようなもので 金融機關と云ふものは

心との範疇か甚だしく相異常に緊張の生活を續けた日 る事實を前に述ねばならぬ 大正時代の忠愛|時代の後四十年間は國民は 皇室に歸し 此時代天下は翕然として只 旗を知らない

く日清戦争日く 『お上』等の一語は端明に 短い民謠の前明中には永を表して居る。 旗を知らざるを隣むの熱情

は先づ内治外政の死力の乏惨さして慢らざるの精神を最も流行した民謠の一つを らざるやを怖れて所謂人心た。 興の日本は此等の大事件のる熱情を燃さしめた其所に ある毎に自己の實力或は足 情事變日~日露戰爭と新 直覺的に其最代人の炎々た は何等の説明も要せなかつ 此時代人の黨村は當時 けられる旺な意氣込を示しに笑を含んで殉するの意氣 遊はされる王政の大業を輔に一身を捧げて自己の信條 ひせられ、天皇躬ら御斷行 口運動の最先頭に馬を進めた諸卿は國步頻に艱難を加 《方が國民の目黨運動、復開治大帝の賢臣良粥となつ 長袖者流に伍せられた皇明治維新の大業を翼賛し へた其當時の日本を預り屋

たものは皇室を絕對高位に 此時代の國民思想を誘導し 見てもわかる。 いな」あれは朝敵征伐錦の|對しては朝敵征代の錦の御 でひらし 『宮さん 宮さん御馬の前の御勇姿を仰いでこの復古|終に新しい日本は臨時代に するのは何じや の精神運動を知らざる者に生れた。 \*後般には國民が此諸皇族を有して居つた。さうして 「つ ゲく」 ♦

今の日本に最もよく當ては 直さなければならぬ時なの 財界の不景氣もモウ足か 内憂外患といふ言葉は 今は全く困難な時局だ政治家が策動して震手案を 教育も根本的に立|危くした事は何人も否む事 が出來ぬ事實である。 動機としたのであります。 月の下旬台灣銀行の閉店 即ち當時の若槻内閣はこ 更に財界動亂の本幕は 助の如き迷惑を與へに至つやうな金の使ひようでは生 豕の政權獲得慾が、國民に|が政蕩三眛で金をバラ蒔く **切ることになるのだ。政治の借金政策で、金持の子息** は萎靡して不景氣にしをか|ことではいかぬ。空ッ景氣 農林は益々疲弊し、商工業」跳ねて、躍つて廻るやうな **炳氣に罹ツてゐる。其結果|積極政策を唱えて、** ■行障害といふ客易ならぬ 言ふ急性的病氣は治ツたが 健康の時でも、

徒らなる 飛んで

もよい時節であるが、世の一であつた。この成行がどう 中は益々不景氣になる。でなったかは今やあまりに天 氣で云ふから、景氣が出て のだらう其原因もいろり うしてこう景氣が悪くなる 一彎銀行救作案を提出したの 詳しく論ずる迄もあるまい

原因は政治にありと思ふ。 あるだらうが、私は其根本 下周知の事實であつて今更

殊に近年益々不景氣の深何等かの策を行はんが為に 銀行の恐荒を起し、 法を以て言へば、政治家が これ等の事賞を春秋の筆 不景氣はどうして立直すか|つて、國民全體はその渦の 然らば一歩進んで、このと直接關係のあることであ

まであるか、それをよく調あるから、國民は宜しく眼康であるか、それをよく調あるから、國民は宜してゐるのでの財界の健康であるか不健て政治に參與してゐるのでに對して為そうとする、そ國民すべてが參政權を持つに對して為そうとする、そ國民すべてが參政權を持つに對して為そうとする、そ國民すべてが參政權を持つに對して為 

いふことが必要でなけれ生活も真に安定を見るのです。さうして健康に導く思ふ。かくてこそ、國民の ならぬ。

銀行はつ

治する

なじ、病氣があればこれをとうますして、力でて、それに對應する葉をを開いて自分等の使命としばて、それに對應する葉をを開いて自分等の使命とし関てするか、それをよく調あるから、國民は宜しく眼

文責在記者」

得るであらう。

不景氣を深刻にに

へて云ふなれば

政治が

さるものがある。

君の熱誠なる御後援に社員

## M

祝賀會を湯本町本社顧問 見 社は豫定の如く去る七月 邊長作氏宅に開催す、恰 五日を以て創刊號の發刊 同日午前十時より紀泉氏の激勵の辞あり次て高 木已之吉氏は來賓一同を代 挨拶をなし立憲新報主筆 午后開會箱崎主幹は 場の 盛會裡に散解した。 夕刻萬歳を三唱して芽出度

陽射しに汗の流れ瀧なす炎なり今後の發展を望むの祝 **余名に及ぶ本社に對する諸紹介及挨拶あつて、一** 者を犯して來會者諸君五十一辞を述べ終りに高木記者の 空晴れて焼くが如き夏の正なる社會の批判指導者と |同感激勇奮を禁する能は|(寫直其一)後廿數名の紅裙||其使命其責任且ツ重大ナル 前に出で紀念撮影をなす。 表して新聞の使用を論じ殿 連の酒間を斡旋するあり、 一同庭 顧フニ磐城自治ナル姓名ノ 堪エマセン。 シタ事ハ洵ニ喜ビノ至リニ 其席末ヲ汚スノ光榮ヲ得マ 宴ニ不肖私モ御招待ヲ蒙リ 本日磐城自治新報創刊ノ祝

ナル感念ヲ以テ生レ出 下ニ生レ出タルコノ新聞ハ 勇氣ト 自治トハ申迄モナク甘 デタル使命ニ基キ常ニ ニ當ラシメル事ヲ簡留 言スルモノデアル 熱誠トヲ以テ事

名ノ如ク自ラ治ルノ意 暗イ政治トナル 而シテ此實際ヲ誤レ 明イ政治ノ實際デア セル生活ソシテ安全ナ 生活ヲナサント キ生活向上進歩 即チ政黨政派ヲ 自力本願デ進 他力本願ニョ 命が溢れてトンとつけば つて居る者から見れば亂 ピンとはね返る思ひがあ 事が教育ノ第一義だと思 重んずる、形式を整へる 雑の感はあるが凡てに生 形式よりも教育内容を 職員間にデモクラシー

其

報

る氣運が目前に働いて居 る故に他ノ意見をよく 長さか訓導だとか代用だ ず皆の職員がカー 常によりよき物を求め で居る凡てが元氣旺盛 かの意識が少しも流れ 精神が徹底してゐる校 ぱい働 や議員などの鼻息をのみ|ビッショリ濡レテシマツタ るものもある。 更して洒々たるもノだ。 教育理論や百年ノ計に改ラ行ク雷ハ 何つて居る、是等有力者湯ニ入ツテ居ル 庭ノ良否などそんな事にタン屋根ヲ打ツ音ガ手ニト 兒童よりも有力な受兄込ンダ雨ノ為二着物ノ裾ガ 校舎ノ良否や父兄ノ家ツタデャンデャント隣ノト 一言ノ批評には万言ノ 氣を取られて居る

出ス、

雨ハ益々猛烈ニナ

資金造成ノ為來ル八月八日

音樂演奏會ヲ開催スルコト

午後六時ョリ湯本座ニ於テ

ニナッタ會費金貳拾錢デア

高堀

平郎

木

10

野獣ノ如クウナ メテ稻妻ガ光ツ

窓ヲカス

トピカピカ

新報ハ 斯様ナ

常ニ公明ナル ル見地ョリ自

E

派ニ立脚シテ自治ノ指

導機關トナリ

鞭韃者ト 批判者

者トモナリ吾人生活ノ

歩ニカヲ致サレ

稚量を持つて居

モナリ破邪顯正ノ勇

余興の福引には各腹を抱 れず十分の歡を以て時移り 胸襟を開きて粗肴も意さるト主筆箱崎君ノ健康ヲ祈ル の廻るにつれ談論風發各自配シ併ラ將來健全ナル發展 茲に又打解けたる紀念の 辞ニ代ヘマス 次第デアリマス聊カ蕪言祝 磐城自治新報ノ創刊

七月十五日

本町縣社温泉神社に於て創 隆昌を祈願した。 磐城自治新報社にては去月 十六日社員一同参集の上湯 立奉告祭執行し且つ社運の 社温泉神 社 奉告祭 験も立ちざころ。 て居る。

覽とか補缺ノ割當とか其 チンと出來て居る然しそ 他一寸一分ノ隙もなくキ 重んずる校舎こか校具と れは形許りで肝心な生命 か圖表とか職員ノ勤怠一 動いて居ない。 教育内容よりも形式を 職員間に階級ノ區別が

長だ俺は師範出だあれは 嚴然と存して居る俺は校 て得々として居る。 をつけて學閥によつて無害ガ軍ラバラバラト 檢定出身だ代用だ何々だ てを批難する事許り熱心 能でも樞要な位置に座つ一九歩モ歩イ とこんなことで人に差別 で他を見る雅量がない間 常に尊大振つて他ノ凡 |手拭ト石鹼籠トヲ持ツテ障 ハタマツテ小川 ニ犬粒ノ オ母サンカラ傘ヲ受取ツテ ŀ パラツト ハ雨ニマジテハネカヘル水 子ヲ開ケテ外ヲ見タラサラ スザマ **トトタ立ガ降ッテ居タ** 昨夜の夕立 好間校高二 ジイ音ヲ立テ、俄 開小 雨ガ降ツラ來タ土 タ思フ頃サア 軒カラ落チル トナッテ流 伊東高雄 打ツ八 吹イラ來ルア、コレデイ、 ダレハ瀧ノ様二落チラ庭ハ ゲシクナッテ草木ヲ洗フ雨 妻ハ光カル雨ハイヨーハ ヲ照ラス大粒ノ雨がポッリ 稻妻がピカート光ル 半空 雷がゴロゴロト鳴ル積イテ 方カラ吹イテ來テ顔二當ル シク水分ラ含ンダ風が北ノ 大空ヲツ、ンデシマツタ著 川ニナツテ時々凉シイ風が 1降リ出シタ雷ハ鳴ル稻

湯本町女子青年團デハ合秋 オシメリダト父ハ云フ、雨 行セラル、御大典記念事業 ◆團音樂演奏會◆湯本町女子青年◆ ハー層激シクナツテ來タ。 好間尋常小學校 渡 田 邊

には他を見やうとさへせ

レ出ス。

**福島縣師範學校** 

石城城第二區 校長協議會

油 井 敬

內鄉裁縫女學校

田本平

双葉郡廣野高等小學校 木松谷千丹木 新報創 五本一 財 方光憲 次 信 茂 枝信樹郎藏平

來尋高 海 學 ノタメニ濡レタ着物ガ泥ガ ステント轉ンデシマツタ雨 ルト小石ノ為ニツマヅイテ 見エヌ、

權威を恐れないで着々と 教育ノ為には他ノ何物ノ して熱烈なる兒童愛ノ精 信を斷行して行く。 を目標 岸に 月廿四日より五日間勿來海 勿來尋常高等小學校では七 臨海學校を開催した ツイテキタナクナツタ。

五、兒童に及べる教育ノ効 果を以て學校ノ誇りとし 去月中本縣實業補習教育主 事影山鹿造氏は本郡内ノ各 ◎視察ニ参リ種々ノ表類日 實業補習學校ヲ視察サレタ 石城郡內補校視察 ク何日ク何ト深山ノ御土 産ヲ戴キマスガ、 一見シ アルが雨ハ未ダ降ラヌ。 雲が立ツラ雷ノナツタ日モ 困ルナート父ハ云ッテ居タ 「オシメリカナクテハ田が 好間校高二 大河原正

心ガ見スニテ同情ニ堪ユ マスト其學校ノサモシイ マセント 益々とロがリマタ、ク中ニ アツタノが煤煙色トナッテ ナイト話シテ中ニ西ノ方カ 分ナラバ雨が降ルカモシレ 今日ハイヤニ蒸シ暑イコノ 來タ見テ居ル中ニ灰色デ 夕立雲がムケーへト湧イ

石城郡第一區

校長協議會

內鄉第二尋校 木緒鈴青 田方木木 利濱榮公唯

清

治治治丸一

次 一 助

猪寬清

## 湯本町湯川治水工事 事の完成を見る

ノ為メ大ニ欣喜トス處デア

和の為め慶賀に不堪へず因

招待ラ添フシタコトハ不省で和氣蕩々の内に散會した 余ノ光榮トシ且ツ本町將來|るは午后九時なり湯本町平

真梅岡

岡

區長第二部消防小頭各位ノ|會社等より幾許の寄贈あり

當り當大字人山炭坑社磐城炭坑社品川

|字翾船工事請負ノ任ニ當||高木、現町長小泉兩氏及ビ|ル消防機械ノ設備ヲ見タル||は亦高木氏の名譽と云ふべ シ仝町湯川河川改修工事|盛大ナル祝宴ヲ開催町議村|治水モ第一期工 テ全力ヲ擧が其完成ヲ期ソリンポンプ放水式ヲ擧行[慘害ニ苦シメラレタル陽川] |長就任當時ノ三大事業ト|第一期工事竣巧祝賀並ニガ|リマス願フニ本町多年其人| 町議各位監督ノ元ニ部落|上六平氏ノ挨拶アリ前町長|合セラ本町第二部ニ新鋭ナ|百圓を决議し贈與せられ 熱誠ナル努力ニョリ去月 町長高木己之吉氏ガ湯本日區長高原小次郎宅ニ於ラ |井坂組頭ノ祝解演説アリ盛|ハ當大字區民ノ努力恪勤ハ

四馬力ノ最新式ガリリンボ防組第二部ガソリンポンプ ビ第二部消防手等ノ工事出|本日茲ニ湯川治水工事第一 大典紀念事業トシテ部落及 ヲ新調シ去ル七月廿四|新調記念トシテ盛大ナル祝|延べ治水問題ニ關シテ第|

一期工事ノ完成ヲ見御一會ヲ極ム。

|期工事竣工祝賀並ニ湯本消||肖私シノ共ニ厚ク感謝スル 所デアリマス爾後コノカラ ル愛町精神ノ發露ニシテ不 並ニ町議各位ノ至誠一質セ 勿論町當局ノ熱心ナル監督 期第三期ト完成シ又第

其職務ヲ勉勵シ他ノ摸 一言ヲ述ベラ御挨拶申 ルモノデアリ ル機械ト相俊ツラ各自

其)

湯本消防組頭

井坂千代松

秋

市

造

磐崎壽常小學校

信夫郡餘目村

々木

宣

丸

店 主

鯨運

上マス 二部組員ハコノ新鋭ナ

植田消防組頭 坂本亀太郎

鈴大箱安前 本平崎 忠 本 一秀

**崎尋常第二小學校** 

瀧小小八

清義市

植田尋常小學校

高政盛

次武喜

湯市運送株式會社

湯本信用無盡株式會社

小名濱水產株式會社

哉春浩平

原

保

磐

崎商事株式 會

小齊篠

海齊治

太郎事 秋 小 鵜 清 州 東 成 元 野 成 成 元 野 成 成

**獨本尋常小學校** 飯岩 高堀 一宅 那次 阿杉近大

事竣巧ヲ見町會より五百圓區會よりこ

しては在職中の功勢に對し に前町長高木已之吉氏に對

田圓次 マ信郎 勿來尋常小學校 目須成伊 田田藤

英 四國政芳 **那松助松** 

暑 H

御 侗

聰 嚴助勇 三井礦山株式 曾年 古川炭礦株式 a 礦業所營城炭礦株式 a 礦業所 **礦業所** 礦業所

昭和三年七月廿四日 植 寄稿ヤ廣告ノ載セ記事輻輳ノタメ御 シタ H タ不悪御了承 ナク次號へ廻 Ŋ ガ澤山出來 告

磐崎第

一尋常小學校

猪江

尻

泉鬲等小學校長

瓜

腷

彌融

藤

信

若

松

炭

#礦

松夕

郎所

磐城建物株式會社

去ル廿一日午后五時ョ リ山形屋旅館ニ於ラ新 勿 赤津 來 Ŋ 修

土白高柴

田土濱田

克久兼正

悳

二一階 堂 英 一信夫郡飯坂尋常小學校長

高

岡

自

動

話 五**車** 

世番部

則

三河沼郡日橋第二尋常小學均喜 二 降 堂 夷 一

湯本町長

歡送迎會

ク集會者は百數十名に 舊町長ノ歎送迎會ヲ開 柳川 あけぼの 玉川尋常小學校長

氏發起人を代表して開 席定まるや若松利惣次 達し空前の盛况を極む 每月一回一部金十五錢 東北唯一ノ初心者指導誌 見本十錢 小名濱壽常小學校長

杉

Щ

勇

大沼郡尾岐高等小學校長

角

堀

車江

務工

業株式

忠會

藤磯

太郎

1/2

田炭礦

恭休

原式

申會

石城郡磐崎村 **外田醫院內** あけぼの會 正八位西

Ш

直三

鄍

水野 直三郎

H

前町長高木氏の謝辞あ 會の趣旨を述べて次に

新町長小泉氏の按接

夏井尋常小學校長 草

金 作

大沼郡藤川高等小學校長 和

知熊

PU 磐工業株式

ツ倉電氣株式會社 庄會,

郎郎通吉平郎平作平三藏郎异吉助一郎郎治平門

侗